

氏名	松本 悟 教授
こんな研究をしています	<ul style="list-style-type: none"> ・開発援助の制度、効果、影響（国際組織、日本政府、NGO、新興ドナー） ・調査の機能（特に環境・社会影響評価） ・メコン河流域/流域国の地域研究、開発と環境（自然・社会環境）
こんな成果を挙げています	<p>▼主な単著</p> <p>『調査と権力』東京大学出版会、2014年。 『メコン河開発』築地書館、1997年。</p> <p>▼主な編著書（主編者）</p> <p>『国際協力と想像力—イメージと「現場」のせめぎ合い』日本評論社、2021年。 『NGOから見た世界銀行—市民社会と国際機構のはざま』ミネルヴァ書房、2013年。</p> <p>▼主な単著論文</p> <p>「ミャンマーの「民主化」を捉え直す—日本ではほとんど認定されなかったミャンマー難民を手がかりに」『難民研究ジャーナル』14号、2025年、34-50頁 「開発協力大綱と軍関係へのODA 供与—開発協力適正会議を通じた2015年大綱運用の検証」『国際開発研究』第33巻、第1号、国際開発学会：55-74頁。 「日本の開発協力の20年—脱「標語」の教育を」『開発教育』No. 70、開発教育協議会、2023年、4-11頁 「中止された環境事業の15年—タイ・サムットプラカン汚水処理事業がもたらしたものの」『環境と公害』49/3、岩波書店、2020年、61-67頁。</p>
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	上記研究分野以外に、貧困、紛争、資源、森林に関する研究であれば、大学院での指導が可能。研究方法としては、院生の研究目的に沿って、インタビューや文献を研究資料とする質的調査の指導を行う。統計データやアンケートに基づく量的調査については、主指導教員は難しいが助言であれば可能。
こんな授業を行なっています	国際協力の概念やアクター（国際機構、NGO）の役割、開発援助の社会・文化的側面、新興ドナー（中国、韓国、タイなど）、開発や開発援助が少数民族に及ぼす影響について学ぶ。毎回文献を指定し、受講生が分担して講読・発表し、教員が補足的な講義を行う。なお、履修する院生の関心をふまえて、授業内容や使用する文献を柔軟に変更する方針である。（2025年度は休講）
学会や社会でこんな活動をしています	NHK 報道記者（1987-92）、日本国際ボランティアセンター（JVC）ラオス事務所代表等（1992-96、ラオス労働勲章）、特定非営利活動法人メコン・ウォッチ代表理事等（1999-）、国際環境 NGO FoE Japan 顧問（2009-）、外務省開発協力適正会議委員（2011-17、20-）、JICA 環境社会配慮助言委員会委員（2011-18、20-）、ジェトロ環境社会配慮諮問委員、外務大臣や環境大臣設置の会議体の委員など。タイ・チュラロンコーン大学アジア研究所客員研究員（2018年度）。国際開発学会常任理事副会長（兼大会組織委員長）、環境アセスメント学会評議員（兼学会誌編集委員）。
私が思う多文化的かつ、インターカルチュラルな人物	文化とは体系的な生きるための工夫（a system of designs for living）であり、集団の全員または特定のメンバーにより共有されるものである。その集団はあらゆる次元に存在している。営利活動や非営利活動かに関わらず、異なる文化を持つ集団間に立って、互いを尊重しながら、共通の目的を達成しようとしている人物。